

【書評】

Jonathan Dil 著

Haruki Murakami and the Search for Self-Therapy: Stories from the Second Basement

ダルミ・カタリン
(広島大学 (博士))

Jonathan Dil (ジョナサン・ディル) 氏の著書 *Haruki Murakami and the Search for Self-Therapy: Stories from the Second Basement* (『ハルキ・ムラカミと自己治療の探究—地下二階からの物語』、私訳、以下同様) は、2022 年に Bloomsbury Academic から出版され、村上春樹の中編・長編小説を精神分析学の視点から論じるものである。村上文学を精神分析の視点から論じるものはいくつかあるが、本書の新しさは、作者自身を精神分析の対象にしている点である。

ディル氏は、村上が執筆を自己治療として捉えていることから出発し、作者が過去に受けた心の傷 (トラウマ) を明らかにしながら作品の読解を進めている。“Introduction” (「序章」) で述べられているように、氏の目的は、村上文学における自伝的な要素を明らかにし、それを村上がどのようにフィクション化したのかを検討すると共に、村上が執筆に対する治療的な動機を如何にして世界的に評価される文学作品に変えていったかを探ることである。

まず、前者について氏が、村上が書き始めた動機を歴史的・文化的環境ではなく、作家の心の傷に見出しているのは特徴的である。氏が着目しているのは、村上の父・千秋との葛藤と彼から引き継いだ世代横断的トラウマの他、村上の高校生時代の恋人だったと想定される〈K〉という女性との関係及び彼女の自殺である。『ノルウェイの森』の直子のモデルの存在については、『村上春樹を歩く—作品の舞台と暴力の影』(彩流社、2000年)において浦澄彬氏が既に指摘したが、〈K〉の友人に直接聞き取り調査を行ったディル氏は更に調査を進め、彼女の自殺を村上が執筆活動を始めた主な動機として位置づけている。後者について氏は、村上文学における無意識の混沌とした力との関わり方に着目しており、登場人物達の個人的な葛藤が時には大きな文化的な意義を持つものに発展していることにおいてニーチェの哲学及びユング心理学との共通性を指摘している。

さて、氏は村上文学における治療のスレッド (脈絡) としては、①メランコリーから喪への移行 = 〈K〉の喪失に繋がるもの、②世代横断的トラウマの象徴的な癒し = 村上の父親との関係に繋がるもの、③回避からアタッチメント (愛着) の獲得への旅 = 両親との複雑な関係に繋がるもの、④ニヒリズムへの反応としての個性化の追求 = より広範な実存的・文化的問題と関連しているものと区別し、それぞれの展開を『風の歌を聴け』から『騎士団長殺し』に至るまでの 14 編の中編・長編小説を中心に辿っている。各章の内容は以下のとおりである。

第 1 章 “The Long Goodbyes” (「ロング・グッドバイ」) では、鼠三部作をかつてのガールフレンドを喪失した「僕」の物語として捉え、主人公のメランコリーから喪への移行 (治療スレッド①)

を分析している。また、「僕」は鼠など、都合よく現れる人物たちとの交流を通して自身の無意識を認識しはじめると指摘し、それを個性化の追求（治療スレッド④）の始まりとして捉えている。本章において最も興味深い箇所は、小島基洋氏によって和訳され、『我々の星のハルキ・ムラカミ文学—惑星的思考と日本的思考』（彩流社、2022）に掲載された第2節“*This is No Place for Me: From Fitzgerald to Chandler to Murakami*”（「ここは僕の場所でもない—フィッツジェラルドからチャンドラー、そして村上へ」、小島訳）である。ここでディル氏は、村上の初期作品群におけるF・スコット・フィッツジェラルドの連作エッセイ「壊れる」と長編小説『グレート・ギャツビー』、及びレイモンド・チャンドラーの長編小説『ロング・グッドバイ』の影響を詳細に論じており、村上が「治療的な動機を説得力のある文学作品に変える方法」（小島訳）を彼らから学んだと指摘している。

第2章“*Self-Therapy and Society*”（「自己治療と社会」）では、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』、『ノルウェイの森』と『ダンス・ダンス・ダンス』を取り上げ、メランコリーから喪への移行（治療スレッド①）及びその解決方法を分析している。本章で印象的なのは、氏が『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の結末を喪失の視点から解釈している点である。氏は、街に留まるという「僕」の決断について、(K)に対する愛着をまだ手放さずにいる村上の心理的退行を反映していると述べ、後期資本主義の日本で自己治療を行うことの難しさに対する村上の理解が深まったことを表していると指摘している。一方で、『ノルウェイの森』を回避から愛着の獲得（治療スレッド③）の視点から論じている。登場人物達の愛着スタイルを分析した上で、本作品は過去のトラウマ体験を言葉にした点では、村上にとって書かずにはいられない個人的な意味合いを持つ重要な作品だったと述べている。なお、『ダンス・ダンス・ダンス』については、作品の結末部分において「僕」がメランコリーの壁をとおり抜け、他人と繋がることに成功する物語（治療スレッド③）として評価していると同時に、「僕」がアニマのようなキャラクターであるキキの死の謎を解けない展開を個性化の失敗（治療スレッド④）として解釈している。

第3章“*The Return of the Real*”（「現実界の回帰」）では、ジジェク概念である「現実界の回帰」をメランコリーから喪の行為への移行の結果として捉え、『国境の南、太陽の西』と『ねじまき鳥クロニクル』を主人公たちが過去の幻想を捨て去り、現実を受け入れる過程を描いた物語として解釈している。『国境の南、太陽の西』における幻想と幻滅のテーマにはフィッツジェラルドの影響を指摘し、『冬の夢』との類似性を分析した氏は、本作品をロマンチックな幻滅（*romantic disillusion*）についてのゴーストストーリーとして解釈している。一方、『ねじまき鳥クロニクル』を世代横断的トラウマの視点から論じ、村上の自己治療プロジェクトの前半（治療スレッド①と②）を完結する作品として位置づけている。以前の作品の主人公に対し、過去のトラウマによる麻痺した状態から脱し、自分が抱えている怒りと向き合う『ねじまき鳥クロニクル』の主人公が自分の影を受け入れることに成功し、治療を求める側から治療を行う側が変わっていくと指摘していると共に、こうした変化は当時村上が経験したであろう個人的な変化を反映していると述べている。

第4章“*Absent Mothers, Abusive Fathers, Heroic Children*”（「不在の母、虐待する父、ヒロイックな子どもたち」）では、1995年以降書かれた最初の三つの小説を取り上げ、村上が同時に二つの異なる方向に進んでいったと主張している。一つは、自己治療に関する知識を若い世代に伝えようとする

る意識的な試みであり、もう一つは、年を取った作者が直面している問題（治療スレッド③と④）の追究である。『スプートニクの恋人』は、語り手の視点から見た他者の物語である点において『グレート・ギャツビー』に類似していると指摘し、語り手が自身の問題ではなく、年下の女性を助けようとする問題設定は、作者自身の執筆の動機を反映していると論じている。『海辺のカフカ』については、以上で述べた二つの動向が同時に展開されていると指摘し、カフカ少年の旅をフロイトの精神分析及びニーチェによる価値の再評価の視点から分析している。14歳のカフカ少年が抱えているエディプス的な葛藤の背後には、人生の後半の目標である個性化に取り組んでいる村上自身の葛藤があると主張し、この二つの動向が同時進行していることが作品を複雑化していると述べている。なお、『アフターダーク』については、治療のテーマとの関連性が低いと述べ、それぞれの登場人物が取り組んでいる心理的な問題を分析している。

第5章“Individuation, Alchemy, and the Death of the Father”（「個性化、錬金術、そして父の死」）においてディル氏は、村上文学におけるユング心理学の影響について、回避から愛着の獲得（治療スレッド③）及びニヒリズムへの反応としての個性化（治療スレッド④）の観点から論じている。『1Q84』に関しては、オウム真理教との関連性を指摘しながら、幼少期の愛情剥奪が個人の成長に対する影響を分析し、登場人物達が物語の終盤で獲得する愛着が、村上が麻原彰晃の物語に対して提供した解毒剤だと述べている。続く『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』の解釈は、本書で最も独創的で興味深い分析である。

本節で氏は、ユングが錬金術における黒化→白化→黄化→赤化のプロセスを、影の認識→アニマとの結合→自己の発見という個性化のプロセスと一致するものとして捉えていたことを踏まえ、主人公の回復の過程を登場人物たちとの交流を通して分析している。なお、主人公が回復しないまま物語が終わる展開を錬金術の失敗に例え、村上文学における個性化の追求（治療スレッド④）が『騎士団長殺し』において更に展開されていくと論じている。『騎士団長殺し』を同様にユング心理学における錬金術の視点から論じた氏は、主人公が個性化を達成できずにいることに、村上が今後も物語を書き続けていくための動機を見出している。また、主人公が物語の終盤で妻と復縁し、自分の子であるかもしれない娘を育てる決心をする展開については、村上が世代横断的トラウマから回復したこと（治療スレッド③）を示していると論じている。

以上を踏まえ、“Conclusion: Self-Therapy and Salvation”（「結論—自己治療と救済」）において氏は、村上にとっての自己治療は、ユングとニーチェと同じく全体性とバランスの探究であると指摘し、村上がその道具として提供しているのは、無意識から湧き出てくる物語だと述べている。

本書は議論が明快で、全体的にとっても読みやすい。直接村上春樹と行ったインタビューの内容や聞き取り調査の結果を取り入れつつ展開されている分析は説得力を持っており、村上文学におけるフィッツジェラルドとチャンドラーの影響を論じる第1章を始め、本書の内容は極めて充実しているものである。本書は英語で書かれているが、ディル氏は日本語の文献にも目を向けており、多角的な視点から分析を進めていることは高く評価すべきである。一方で、個性化の問題の追究など、村上文学におけるユング心理学の影響については日本では既に複数の研究者が論じており、それらの文献に対する本書の位置づけが気になった。

個性化の問題を錬金術の視点から論じるディル氏のアプローチは新鮮で興味深い。ユングの錬金術研究に詳しくない読者にとってはやや難解な箇所がある。また、分析の主な対象が長編・中編小説であるため、テキスト分析に対しては所々疑問が残る。例えば、氏は『騎士団長殺し』に登場する身長 60 センチの騎士団長について、村上が 2008 年にスイスを訪れた際に、ユングがボーリングンの塔にある石に彫ったホムンクルス (=錬金術の最後に現れる小人) から着想を得たと主張し、免色と白いスバル・フォレスターの男という登場人物の象徴的な意味をボーリングンの塔との関連性から解釈している。作品を単独で読むと氏の分析は説得力があるが、1980 年代に書かれた「踊る小人」や「TV ピープル」には既に騎士団長を連想させるようなキャラクターが登場していたことを考慮すれば、騎士団長のモデルをホムンクルスに限定することに対しては疑問が残る。一方で、『1Q84』ではボーリングンの塔の描写が出てくるにもかかわらず、リトル・ピープルをホムンクルスと関連づけず、個性化の問題に関する分析が書き足しのレベルに留められていることに対しては物足りなさを感じた。一冊の本では全ての作品を論じることは不可能だが、村上文学において重要な位置を占めている短編小説集も視野に入れてもらいたいと思った。

以上のような細かい疑問をさておいて、村上春樹の執筆活動を自己治療の視点から論じる本書は村上春樹研究への重要な貢献であり、一刻も早く日本語に訳されることを期待したい。